
TRUE BEAT ~ 追憶の少女 ~

月野優

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

TRUE BEAT 〈追憶の少女〉

【Nコード】

N3604V

【作者名】

月野優

【あらすじ】

記憶を失った少女があたえられたのは名前と銃。

記憶喪失の彼女は、とある研究所に入社しながら記憶を探す事に。

しかし、彼女が配属されたのは過去になんらかの事情を持つ少年少女達で結成されている「SRP (social reform project)」だった。

彼等は自由を代償に得たものは超人的な能力。

彼女は任務をこなしつつ記憶を探すのだが、記憶が少しずつ戻るたび明かされていく真実と過去とは。

1 - 1 アフェクションメイドン（前書き）

この作品はフィクションです。

人物、団体、物語は全てフィクションであり、実際とは全く関係ありません。

1-1 アフェクションメイデン

記憶。

生物に蓄積される過去に関する情報。

将来に必要な情報をその時まで保持する事。

生物体に過去の影響が何らかの形で残る事。

目で見た風景や物体や文字、耳で聞いた声や音は知らず知らずのうち脳に蓄積され、必要な時に情報を引き出す。言わば、記憶は生きる為の情報源だ。

その情報源が次に目覚めた時にぼっかり無くなっていたらどうだろう。

暗闇の迷路で手探りでゴールを目指しているのと同じだ。

記憶喪失者の末路は空っぽだ。

古今東西、東へ西へ、どこへ行ってもその中身は満たされない。満たされるのは絶望だろう。

そして、私もその身元不明の記憶喪失者の一人だった。

一ヶ月前、私は轢き逃げ事故にあった私は目が覚める前までの記憶が無くなっていた。

頭の打ち所が悪かったらしく、半月も昏睡状態が続いていた私が病室のベッドで目が覚めたのは一週間前の事だ。

男は民間研究所でもっとも大きい神宮試験研究機関の所長で、いつも眉間にしわを寄せた気難しそうなお爺さんというのが印象的だ。見た目とは裏腹に私が昏睡状態の時から毎日私の病室に足を運んでくれ、目が覚めてからも退屈しないように、とずっと話相手になってくれていた。

その時に聞いた話なのだが男には一人娘がいるらしく、十五年位前

に男を作って出て行ったとか。だから私が出て行った娘と重なって放っておけないのだろう。

恐い顔から時折見せる優しい笑顔は私に向けられたものじゃないと思うと少し寂しくなるのだった。

目が覚めてから一週間たった日、私は病院を追い出された。

案の定というか当たり前と思う反面やはり落ち込む。

落ち込むというより他人は自分を助けちゃくれないという事に絶望したのだ。

生活保護を受け戸籍をつくるのは簡単だ。

でも私は生活保護を拒否した。

プライドとかではなく私は誰かに助けて欲しいという甘ったれた感情があったのだ。

途方に暮れる私にまたしても総一郎さんは私に手を差し伸べた。

私の研究所で治療を受けないか？という言葉をかけてくれたのだ。

いや、内心どこかで総一郎さんが助けしてくれると思ってたんだろう。いつからか私はその男が、自分の空いた穴をすっぽり埋めている事に気付いた。

研究所に来て三日目がたった夕方、辺りが夕日で綺麗なあかね色に染まり外では小学生くらいの子供達がお互いにちよっかいをかけながら元気に下校している姿を窓越しにベッドから見ている。

一応身体を動かせるまで回復したとはいえ、まだ安静にしときなさい、と総一郎さんから言われて、もしかしたら、と知り合いが迎えにくるのを待ちながらベッドで過ごす日々が続いていた。

その日も知り合いは姿をみせる事無く一日が終わっていく。身体がじつとしていると頭はどんどんネガティブな方へと思考が回る。

実際、本当に知人など来るはずないとわかっている。

来たところで私はまたしても迎えを拒否するだろう。

夕日の照らす色が私を焦らすかのように、もくもくと街中を染めあげている風景はまたいつ追い出されるかもしれないという絶望感へと背中を押しているのだ。

「体の調子はどうだい？」

ベッドから窓を眺めていた私に寝癖でボサボサの髪の毛の眼鏡をかけた男が話しかけてきた。

男は神宮研究所医療部主任の加治木透かじきとうめい先生だ。

いつもはヘラヘラと笑い、頼りの無さそうな人だが本人曰くそこそこ名の知れた名医だとか。

「今日も知り合いが一人も来ませんでしたね」

優しく声をかけて来た加治木先生を一瞥し、また窓に目をやり半ば八つ当たりしながら皮肉混じりに答えた。

加治木先生はそんな私を怪訝する事も無く笑顔のままベッドに腰掛けた。

「焦る気持ちも良くわかるよ。でもね、君みたいな哀れな患者は沢山いるんだ。まだ君は僕達に拾われてラッキーな方さ」

私は世界で一番不幸な少女なんだと思っていたのをまるで見透かしたかの様に言う加治木先生に苛立ちを覚えながら無視を決めこんだ。加治木先生は私の態度を気にもせず話を続けた。

「君を引き取ったのは、助けた以上その後放っておくのは忍びないって所長が言い出してね。数時間、上層部達が話合って決まった事なんだ。でまあ、所長は君を相当気に入ってるらしくてね、この研究所に住み込みで働かせるって所長がまたわがまま言い出して困ったものだよ。どうだい？後は君の返事を待つだけだったんだ」

加治木先生が話終えて数秒経ってからようやく話の意味が理解し、はっと加治木先生の顔を見るととても優しい笑顔で答えを待っていた。

頭の中をもやもやした感情なんて蹴散らしたのは、たった一つの素朴な思いだった。

「働きます。いやっ、働かして下さい！総一郎さんの為に私

の全てを尽くします」
どうせ何もかも空っぽの自分の全てをあの人に尽くしたい。
私はいつしか命の恩人を愛しいそう思っていたから、それを肯定する言葉が欲しかったのだろう。

神宮試験研究機関。

海に囲まれた街に建つこの研究所は、個人企業の民間研究所にしてはこの国では一番と言えるだろう。

神宮研究所では主に生物工学を研究している。

遺伝子工学、バイオテクノロジーである遺伝子操作、クローン技術などである。

神宮研究所の敷地面積は一万坪を越す。

その中に、本練、試験練、医療練、宿舎などが建ち並んでいる。

本練は所長室や事務所、資料室などがあり、そして私は本練の所長室の扉の前へと来ていた。

少し躊躇しながら扉を軽く二、三回ノックすると出迎えてくれたのは所長の神宮総一郎さんだった。

「おお、待つとつたよ。さあ、中に入りなさい。今日からさつそく働く事になる。説明する事が山ほどあるから覚悟しときなさい」

まるで数年ぶりに孫が遊びに来たかのように総一郎さんは上機嫌で部屋へ招き入れ、私は軽く会釈をし所長室へ入っていった。

遠慮はいらんよ、とソファへと促される。

総一郎さんは二つ湯飲みを用意し急須からお茶を注ぎ、机越しの私の正面のソファへ腰を下ろした。

「さつそく本題に入ろうか。この研究所が何を研究しているかは前に話した通り知っているな？わしらが研究している遺伝子操作、クローン実験は倫理的な側面や自然環境との関係において生物多様性に悪影響を及ぼす恐れがあるとの観点から、あまり日当たりが良い

とは言えん。しかし、今や遺伝子組み換え作物など実用化され、近年では人を対象とする倫理上の重大問題だとする意見がある体の一部の細胞に必要な遺伝子を導入して不足、欠失している機能を補う遺伝子治療は有望視されすでに研究段階まで入った物もある。だが、それは表向きの話　　わしらがもつとも本題としているのは人間限界能力覚醒を目的としたDNA操作による人体実験だよ。それも少年、少女を利用したね　　」

私は最後の言葉でようやくある事に気が付いた。

一ヶ月前に轢き逃げ事故にあつて半月以上、昏睡状態だった。

さらに半月が経ち回復し自力でなんとか体を動かせるが、あくまで松葉杖ありでの話。

病院を追い出され研究所で治療を受け始めて三日目、すでに完治までに回復した。

普通に考えたらおかしい。

研究所に来てからの回復速度が尋常じゃない。

DNA操作されたのはいつだろう。いや、いつでも操作できた。

ここに来て、ずっと訳のわからない治療を受けていたのだから。

それから総一郎さんはどこか憎らしい顔でつぶやき始めた。

「　君は世間とは理不尽だとは思わんかね？」

「はあ」

「今や、この国は病んでいるよ　　麻薬取引、暴力、非合法賭博、人身売買、違法行為に染まっている。日時、それらは裏社会で絶え間無く起きている　　それらには全て政府が関わっている」

「それと研究所の研究となんの関係が？ここだって非合法研究をしているじゃないですか」

矛盾した話に少し怪訝しながら答えた。

「中央病院でわしの娘の話覚えてるか？」

「ええ」

「私の娘はな、十三年前に殺されたよ。政府によってな　　娘は政府の裏に気付き調査しとつた。色々嗅ぎ回る娘に気付いた政府

は娘を暗殺した。死体は港で発見された。そりやもう無惨な姿だったよ。その時誓った。娘の仇をとろう、この淀んだ世の中を私の手で直してやろうとな

色々聞きたい事はあった。

しかし、今は質問より先に言う事があるだろう。

総一郎さんは私に何を求めてここに連れて来たか明確だ。

「なら私はあなたの手になります」

「SRP

?」

ソーシャル

「そう、SRP。social reform

リフォーム

プロジェクトて

いう我が研究所の特別技術試験部だ。そして君の配属する部署だ」

私と総一郎さんは本練のエレベーターで、階を記される画面を律儀に見ながら話し、地下へと向かっていた。

B1 B2 B3 いったいここは地下何階まであるんだ

ろう。

本練の最上階は十階まである。

敷地は驚くほど広すぎる。私は迷子にならないよう注意しないと、など考えていたらチンと音がし扉が開いた。

扉の向こうにはテンキー付きの頑丈そうな扉があるだけだった。

それを総一郎さんはテンキーをカタカタ打ち始めテンキー右下のエントリーボタンを押すと扉はすんなり開いた。

「さあ、入りなさい。ここがSRP本部だ」

「え?」

SRPの部屋らしい所には150インチの液晶テレビにそれに見合った大きいテーブルとソファ、冷蔵庫まで置いてある。

テーブルにはオセロにトランプに麻雀牌、お菓子の袋の残骸に、あと

「和!ちゃんと部屋は片付けると言っているだろ!」

ツインテールの少女がいた。

1-1 アフェクションメイデン（後書き）

初めての作品となります。

至らぬ点もありますが、どうか温かい目で読んでください。

ご意見、コメント、アドバイスなどお待ちしております。
よろしく願います。

1 - 2 ヘイトドージャー（前書き）

この作品はフィクションです。

人物、団体、物語は全てフィクションであり、実際とは全く関係ありません。

1 - 2 ヘイトドージャー

「おっはよー所長。 と誰？」

S R P本部らしい（大富豪家のリビングにしか見えない）部屋のソファに座るツインテールで少し吊り目の少女は総一郎さんに挨拶し、小首を傾げながら不思議そうに私を見ていた。

「ああ、紹介しよう。この子は色々と事情があつてな。今日からS R Pと一緒に働く事になった、えー！ 実名は名前がわからん。まあ、とりあえず今日は確か仕事あつただろ？一緒に連れて行つてはくれんか？」

「はあ？なにそれ。紹介になつて無いし、しかもまた捨て猫拾つて来たの？所長も物好きね。そもそもこんな子使えんの？」

何が気に入らないのか、ツインテールの少女は私をまじまじと見た後ふんつと鼻を鳴らしそっぽを向いた。

その刺々しい言い回しが第一印象になつた彼女とこれから一緒に働かなければいけないと思うと気が重くなった。

「まあ、そう言つな。連れて行くだけでいい。終わつたら好きな物買つてやるから」

「マジで？欲しいカバンがあつたんだよねーラッキー」

彼女は、その言葉を待ってました、と言わんばかりに大はしゃぎをしている。

そのやり取りに少し戸惑つた。

まるで孫を甘やかすお爺さんと、我儘ながら祖父が大好きな孫の会話だと思つたからだ。

それを少なからず嫌悪感を抱いていた私は自分が不憫でならないし、少々罪悪感さえある。

ツインテールの少女はソファの上で跳ね回りながら喜んだ後、私の前へ駆け寄つてきた。

「私は照国和^{てんこくわ}。趣味は色々、特技はなんでも、以上！せいぜい私の

私の足を引つ張らないでね」

今の自己紹介でわかったのは彼女が大雑把かつ高飛車な性格だという事だけだ。

聞いた話では彼女はこのSRPの中でも戦闘能力は桁違いに高いトップエースだという。

照国和の自己紹介が終わり、次は私の自己紹介。

しかし、問題は一つあった。

「それで、あなた名前は？」

「わかりません」

記憶喪失故、自分の名前すらわからない。

先ほど彼女も言った通り自己紹介にすらならない。きつと彼女はまた怒るだろう。

使えない、一緒に働くなんでごめんよ、などと私を蔑むだろう。

「えっと　記憶喪失？まあ、あなたみたいな子には沢山いるし大丈夫よ」

思いの他、彼女は微塵も卑下する事なく、それが当たり前だ、などでも言う様に接してきたので少々拍子抜けした。

そもそも、記憶喪失なんてここじゃ珍しくないのだろう。

他にも沢山いると彼女は言った。

思ってみれば自分より酷い人生を歩んできた者もいるのだから、私の記憶喪失もたいした不幸自慢にもならない。

そしてSRPは、そんな少年少女で結成された研究所の暗殺組織。

つまり記憶喪失などなんらかの事情がある方が利用しやすいという訳だろう。

「しかし、名前が無いと不便極まりないな」

総一郎さんはまるで自分のことのように苦い顔をして呟いた。

そう、思った以上に名前が無いのは厳しい。

相手に名前を教えなくては集団行動ではもちろん、たった一人の相手ににすら信頼を得られるはずも無い。

ましてや愛する人にも名前と呼ばれないのは辛過ぎるのではないだ

ろうか。

総一郎さんは顎に手をあて少し考えてから言った。

「よし、君はこれから霧島黒子だ」

「決めるの早っ！でも確かに名前なんて適当でいいわよね」

彼女の言う通り、きつと深くも考えないでつけた名前であった。

だが過去の歴史も中身も空っぽの私は名前をもらった事が初めてもらったクリスマスプレゼントの気分の様で、とてつもなく嬉しかった。

「とつととしなさいよ！もう出勤命令きてるんだから！」

「いや、でもこれ」

私と照国さんとSRP本部内奥の部屋にある女子更衣室で、今後からお世話になるうSRPの制服にきがえている最中だった。

「なによ？私達の制服よ」

研究所医療部試験用の寝着から着替えた制服は学校の制服に軍服を混ぜたような物だった。他から見たらもう本当に学校の制服だ。

「ああ、これね。私達がスーッなんてパリッとしたもの着てたら不自然じゃない。学校の制服だったら自然でしょ？」

学校の制服というよりどちらかと言うと軍服よりなのだか、これ以上言うと彼女の怒りに触れそうなのでやめることにした。

するとツイントールの少女はまたもや私をまじまじと見ている。

「あんた地味で陰気だけど以外に美人よね　それより髪長いわね。帰ったら切りなさいよ。その方がもっと可愛く見えるから」

腰下まである髪は事故以前まで伸ばしていたのか、ここまで伸ばすのには少々苦労したのだろう。

しかし、今は当然そんな記憶など覚えていない訳もないし、言われてみれば確かに鬱陶しい。

帰ったら切ろうか、など考えてるあたり、本当に記憶は無いのだと

実感する。

SRP本部のリビングの奥には廊下があり、左右に部屋が三部屋づつある。

右手前から、キッチン、男子更衣室、女子更衣室。左は、資料室、物置、シャワー室がある。

さらに廊下の突き当たりにはもう一つ部屋があり、私達は女子更衣室から突き当たりの部屋へ移動した。

部屋へ入ると目に入ったのは、溢れんばかりの銃器と刃物だった。

「以外に驚かないのね。大抵はビビって逃げるか、泣き喚くわ。この前の男は一時間近く放心状態で突っ立ってたわ」

「驚く前にある程度説明を受けてるから」

「ふーん…あつそ、じゃあ用意して行くわよ」

先ほど総一郎さんに説明を受けていた私はそれを総一郎さんの役に立つ為のあつて当然のモノと思い込んで、初めて見たにも関わらず落ち着いていた。

その冷静さに自分でも驚くくらいだ。

そんな私を見て釈然としない様子で照国さんは面白くなさそうにふんつと鼻を鳴らしていた。

きつと照国さんは有能でプライドが高いが故に人に頼ってもらい助けるのが好きなんだろう。

簡単に言えば、自信過剰の上に負けず嫌いな仕切りたがり屋だ。

なんとも難しい性格をしている。

だからといって、わざわざ気を使う器用さなど持ち合わせてはいない。

そのうちに取り組み合いの喧嘩にはなるだろう。

出会った最初の白紙に近い照国さんのプロフィールに書き足す内容が出来た。

入社というべきか入隊というべきか困る部署に入った私は当日ぶっつけ本番で実戦に駆り出されていた。

そして、今作戦の舞台はフェリー。私達はフェリー乗り場で乗船する乗客する列に並んでいる。

並んでいるといっても、乗客はさほどいない。私達の順番まで後少しだ。

「あんた作戦の内容わかってる？」

「はい」

海に囲まれたこの町は木災島という離れ孤島にフェリーで行き来できる。

そのフェリーに今作戦のターゲットが乗船し木災島に行くという。

ターゲットは第十三国立研究所の研究員で近頃極秘の研究をしていたらしくサンプルがようやくでき、それに目を付けた木災島の有力団体が莫大な金とある条件付きで買い取った。

それは私達にとって大きな障害になるらしい。

そうならないようフェリー内で木災島に着く前に研究員を暗殺しサンプルを持ち帰る、あるいはサンプルの破壊。

「だいたいはわかってるようだし、あなたは見ているだけでいいから。それに、これは私の問題だから　とりあえず社会見

学だと思って付いて来なさい」

フェリーを乗る為にチケットを購入し、フェリーといえど軽く持ち物検査をする。

私は上着の中にベレッタM92Fという拳銃とボウイナイフを持っている。照国さんも上着の中には同じように拳銃とナイフを隠し持っているはずだ。

流石にバレれば警察が飛んで来て、もう作戦どころでは無くなるだろう。

一人、また一人と持ち物検査を終えフェリーへ乗船して行く度に私達の順番が近くなる。

なのに照国さんは動揺する素振りすら見せず、余裕の態度で順番を

待っている。

「次の方どうぞ。お嬢さん達、学生さんかい？」

「はい、そうですが。何か？」

「いやー木災島へ行く学生さんは久しぶりでな。近頃、木災島に妙な団体が来てから島へ入る為に許可が必要になつてな。島へ行くフェリー使つやつは地元民ぐらいしかいないからな。あんたら島のもんじゃないだろ？」

「まあ、そんなところです。はい、許可証」

あらかじめ本部で造つておいた偽造許可証を見せるとすんなり通してくれた。

「ああ、どうも。では、いい旅を」

持ち物検査はスルーされ唖然とする私が面白かったのか見て照国さんは笑いながら話す。

「制服着てれば色々良い事あんのよ。まさか制服来た女の子が銃とナイフ持つてるなんて誰も思わないでしょ。ちよるいもんよ」

先ほどの礼儀正しい態度とは百八十度変わって、腹黒い事を言い終えるとフェリーへと入って行き、すぐさまポケットから端末を取り出し、つかつかフェリーを歩きながら電話をしている。

「こちら照国、フェリーに侵入成功しました。了解。では、引き続き作戦実行します」

照国さんは本部に連絡を取っていたようだ。

いよいよ開始する作戦に対して高揚感が感じられた。

それは私だけじゃなく、多くの場数を踏んできた彼女も感じている様だ。

「もう一度確認するけど、いい？あなたはあくまで見てるだけ。絶対に邪魔しない。わかった？これは私にとって重要な作戦なの。邪魔したらあんたも容赦無くぶつ殺すわよ」

木災島フェリーへ乗船して一時間たった頃だった。

「あーお腹いっぱい！このうどん美味しいって噂は本当だったみたいね」

「」

「ん？どうしたの？」

「 作戦は？」

「 まだ大丈夫よ。島までまだ時間はあるし、それにボディガード三人もついてるなんて聞いてないわよ！トイレまで一緒に行くとかバカじゃないのー」

情報収集のミスによる護衛三人の同行を把握できていなかった私達は作戦進行に行き詰まり、本部が作戦を練り直し中、木災島フェリー名物うどんを食べながら暇を持て余していた。

それに対し照国さんはブチブチ文句を言いつつフェリーの観光を満喫しているようにも見える。

「べつ、別に楽しんでるわけじゃないのよ？そりゃ人間なんだから腹も減れば喉も渴くでしょ？ただそれだけよ」

どこから買って来たのかトロピカルなジュースを飲んでいるのをジト目で見ている私に気づいて弁解をする照国さんは説得力の欠片すら見当たらなかった。

そうこうしている内に照国さんの端末が鳴った。

「はい、こちら異常ありません は？強行作戦？いえ、一般人はどうすれば？ 了解」

端末をしまい照国さんの苦虫を噛み潰した様な表情になりながら話す。

「作戦変更よ フェリーを占拠し、その後ターゲットを殺害。

必要であれば一般人も ちっ、こんなのもうテロリストと一緒にじゃない」

歯軋りが聞こえるぐらいの怪訝な表情になる。

「まあ仕方ない。これも仕事だし作戦実行するわよ って、なんかおかしくない？」

照国さんが周りをキョロキョロ見渡す。

確かにおかしい。さっきまでいたはずのターゲットどころか乗客一人いなかった。

しん、と静まり返る船はエンジン音と波音だけが聞こえる。

「えっ？なに、どういうこと？」

まるで神隠しにでもあったかのようにフェリー全体人が無い。

「とりあえずブリッジへ向かうよ」

メアリーセレスト号と化した無人のフェリーに私達二人だけ取り残され、少し狼狽していた照国さんだったが状況把握の為にすぐにとりあえずブリッジへと向かう。

客室から外に出て階段を最上階まで駆け上がり、屋上テラスを突き抜けブリッジの扉を開く。

勢い良く開いた扉の向こうに居たのは血だらけの乗組員が横たわっていた。

「なにがあつたの？」

照国さんは倒れた乗組員に駆け寄り抱え起こした。

「うっ　突然、客が消えたと連絡が入って　探しに行った乗組員達も姿を消した　心配になってブリッジを出ようとしたら後ろから撃たれた　ぐっ」

出血が酷い。喋る度に血がどくどく流れ出す。

「頼む、乗組員と船客を　探しに行ってくれ　なにがあつたかはわからないが責任は私にある　万が一の事があつたら

私は

「わかつたから喋らないで！私達が必ず見つけてあげるから。ね？」

「　　ありがとう」

喋り終わると次第に静かに息をしなくなった。

照国さんはゆっくり床に寝かせ、自分の持っていたハンカチを上着のポケットから出して顔に被せた。

「ちっ、状況が読めてきた。だいたいおかしいと思つたわ。バミューダ海域じゃあるまいし、客全員が突然を姿を消す？バカバカしい

最初に言ってたでしょ？このフェリー、島の住民しか使わな
いって。客全員がターゲットとグルなのよ。どこかで私達の作戦の
情報が漏れた。護衛は単なるカモフラージュ、畏だったのよ」

「でも、どうやって姿を消したの？」

「救命ボート無くなってる。うどん食ってる間に少しづつ逃げたん
でしょ？まあたぶんターゲットは残ってるわ。私達を殺す為にな
つまり、うどん食わなきゃもう少し早く気づけていたのか。」

「まあこっちも強行作戦する予定だったし、手間が省けてラッキー
よ。しかもタイマンしてくれるなんて願ったり叶ったり。あーうど
ん食っててよかったー」

「照国さん　とても苦しい言い訳にしか聞こえません」

「うっさいわねー。それから照国さんってやめなさい。特別に和っ
て呼んでいいわ」

フフンと言った感じで得意気に鼻を鳴らす和を見てやれやれと肩を
竦めて見せた。

しかし、この状況でよくもそんな態度でいられるものだと感心する
ほど冷静な和は数々の困難な状況を乗り越えた事がわかる。

その時、ブリッジの扉が突然に開き先ほどターゲットを警護してい
たゴツゴツとした体付きの大男が立っていた。

「みーつけたー」

大男は目を見開きニヤリと不気味に大きい口を歪める。

大男は武器は持っていない。肉体派な大男は体術で人を殺める事が
出来るのは明確だった。

こちらは武器は持っているものの小柄な少女二人。

ブリッジ内の小さな空間での接近戦では、どちらが有利か一目瞭然
である。

大男はジリジリと距離を詰めてブリッジ内に私達を追い詰める。

大男は和に標的を絞り一気に詰め寄り拳を振り上げ和に目掛けて振
り下ろす。

だが、その拳を和は音も立てずにすんなり受け止めた。

「あ、れ？」

なんとも間抜けな声をあげる大男。

男は何があつたのかわからないという表情で硬直していた。

「ねえ、筋肉ゴリラ。知ってる？私達ってDNA操作で人の何十倍の力を発揮できるの。あんたの見掛け倒しの筋肉じゃ私の身体はそれくらいじゃ倒せない」

和は受け止めた拳を握り潰し大男を蹴り飛ばす。

和の何倍も大きい巨体が数メートルも吹っ飛んだ。

「ひっひい。たすっ、助け」

震えながら四つん這いでブリッジから這いずり出る大男の頭を後ろから掴み和は不敵な笑みを浮かべていた。

「バーカ」

ブリッジを出て客室へと戻り作戦を練り直していた。

「ちっ、あの筋肉ゴリラの血がまだ取れない。まあいいわ、あの筋肉バカが居たとなればターゲットも居る確率も高いからとりあえず手当たり次第に探しましょう。たぶん残りのボディガードもいるけど」

「和、私はなにをしたらいいの？」

「だから、あんたは何もしなくていいの。あのクソ野郎を殺す為に今までどんな苦しい仕事をしてきたか　これは、またと

無いチャンスなのよ。私一人で」

和は憎しみで一杯の表情で拳を握る。

その反面、どこか哀しそうな表情もあるようなのは私の気のせいだろうか。

その時だった。背後から銃声が鳴り響き渡った。

和がドサツと倒れ、白いシャツに赤い色がじんわり滲み出し、それがだんだんと溢れ赤い池を作る。

急いで振り返ると三人の男が立っている。その内の眼鏡の男はアタツシユケースを持ち、拳銃をこちらに向けていた。

「まさか、こんな子供にあいつが殺されたとは　　信じられん

お前らが狙ってるこのサンプルはな、私の人生を全て注ぎ込んだ物だ。妻も娘も全てだ。絶対に成功しないといけない　　」
銃口を私に向けられ恐怖でガチガチ震える身体は金縛りのようにその場で身動きが出来ない。

脳は逃げる逃げろと体に指示を送っているにも関わらず、体は全てを放棄した様に硬直する。

「お前に恨みは無いが、このサンプルを渡す事は出来ない　　悪
いが死んでくれ」

死を受け入れるには早すぎただろうか　　しかし、さっきまで動かなかった体はすんなりそれに従ったかのように目蓋を閉じる事は出来た。

銃声が鳴ったと同時に突然に腕を引っ張られた衝動が死を待っていた私の意識を呼び覚ます。

引っ張られる方向を見ると私の腕を引っ張る和がだった。

テーブルと椅子をぐり抜け、飛んで来る弾を上手く避けて客室を脱出した。

1 - 2 ハイドローガー（後書き）

感想お待ちしております。

1 - 3 再会、そして別れ（前書き）

この作品はフィクションです。

人物、団体、物語は全てフィクションであり、実際とは全く関係ありません。

1 - 3 再会、そして別れ

客室から脱出した私達は最上階のテラスへと移動していた。

「あんた　　なんで逃げないのよ」

先ほど後方から銃で撃たれていた和は苦しそうに言う。

弾は貫通しているが、撃たれた胸の傷から今も流血している。

「それより血が　　」

「こんなの平気、なんの為のDNA操作よ。直ぐに治るわ　　それより、あなた今すぐここから出なさい」

銃を向けられ臆病にも身体が動かす事が出来なかった私を心配したのか、あるいは邪魔者扱いしてるのかフェリーからの脱出を促す。

「　　嫌だ。和を放って行けない」

だが、私だつてすぐには引けない。

私も一度は見捨てられた身だ。

取り残される怖さだつて知っている。

「!?!?　　あんなね、邪魔つて言われてんの気づかないの? 足で

まといななのよ」

脱出を拒否した私に今度は厳しい言葉で脱出を強要してくるがここは引けない。

そこで、このフェリーに乗った時に気付いた事を逆に質問する。

「和はあの男と知り合いなの? 何故そんなに憎そうにしているの?」

フェリーに乗船した時から垣間見る和の憎悪の表情と、その裏にある悲しそうな表情はずっと伝わってきていた。

そして、それはターゲットに向けられたものだとも気づいていた。

和は視線を反らし、少し考えた後観念した様な表示で口を開いた。

「　　バレてたか、まあ隠してた訳じゃないけど。　　あの男

はね、私の父親なの」

「　　じゃあなんでSRPなんかに?」

そもそもSRPは何かの事情があり、総一郎さんが拾って来た子供

達で結成されている組織。

父親が居る、ましてや記憶喪失とも思われぬ和は何故SRPなかに居るのだろうか。

「私の家庭は父と母と私の三人家族だった。父と母は第十三研究所の研究者で、とても裕福では無かったけど、すごく幸せな一般的な家庭だった。当時、父はDNA操作による治療を研究していた。でもある時、父の研究は上手く行かず何度繰り返しても失敗、次第にノイローゼになっていた。そんな父を母は見えていられず、母はある決心をした。母は自らが実験体になると提案し父は猛反対したが母は父の為だと押し切り、母を実験体とした人体実験が開始された。

研究は母のおかげで順調に進める事が出来た。しかし、成功まで後一步という所で事件は起きた。研究機材のエラー障害により母の身体への負担が大きく、身体はもちろん耐えられず、DNA操作による副作用で無惨な姿で死んだ。父は母が死んだ事により頭がおかしくなり、そして、私も実験体にして研究を続けるが、私の身体は実験の繰り返しと副作用でボロボロになり、死にかけの私は捨てられた。死の寸前で私は思った。復讐してやる、私と母をこんなにした研究所と父を殺してやるって。その後は、所長が拾ってくれてあなたと同じよ。酷い話よね。」

和は話した事に少し後悔したような顔をしてから何やら吹っ切れた感じに溜息を吐き、気持ちをシフトチェンジした様子だ。

「あなたがここに残るのは認めるわ。ただし条件が二つ、あの男は私が殺す、後は黒子あなたは絶対に死なないで。いい？さて、反撃といきますか！私が言う事よく聞きなさい。」

子供の内緒話のように和は耳元でコソコソと作戦内容を話した。

小一時間経った頃、ボディガードの一人が黒子と和を探しに最上階のテラスへと上って来た。

しかし、テラスには人っ子一人いない。

「まったく、あのガキ共どこに隠れやがった」

ボディガードの男はテラスのテーブルの下まで隈無く探すが見つからない。すると、男の背後から子供が走る足音が聞こえる。

「ははっ、見つけたぜ。かくれんぼの次は鬼ごっこか。いいぜ、付き合ってやるよ」

テラスからフードコートへの階段を少女は駆け下り、続いて男も下りる。

階段を下りた少女はフードコート内へと入り、フードコート奥のトイレへ駆け込む。

男は勝つたと確信し口端を吊り上げ、同じくトイレへと入った。

「はあはあ　お嬢ちゃん以外と足速いんだな。おじさん疲れたよ。さて、鬼ごっこは終いだ」

男は膝に手を付いて、荒々しく息を上げて顔を上げた。

ニヤニヤと笑う、髪が黒く長い少女　黒子が立っていた。

「？　何がおかしい。今からお前は死ぬんだぞ？さっきの怯えっぷりはどうした？」

「何故おかしいかって？そりゃこんなにおかしい事は無いもの」

「　なるほど、恐怖で頭が狂ったか　美人が台無しだ。じやあ、もう死んでくれ」

「　いいえ、死ぬのはあなた」

「は？」と男は素っ頓狂な声を上げ、自分の後頭部に何かが当たっている事に気づく。

「　まったく、狂ってる上に悪女なあ、やっぱり美人が台無しだよ」

トイレに血が飛び散り、銃声が鳴り響く。

「後は二人。さっきの作戦は大成功ね！私もう、あの男が必死で黒子を追いかける所を見て大爆笑！」

先ほどのシーンを思い出したのか、涙ぐみながら笑う和。

その和の笑顔に見とれてみると、一瞬『どこかで見た事がある笑顔』が和と重なった気がした。

はっとして目を擦りもう一度見たが幻覚だったのか、もう見えなかった。

しかし、こうして笑っているとどこから見ても普通のどこにでもいる女の子だ。

もしも彼女の過去に何事もなく普通に生活していたら、なんて考えると少し切なくなる。

今は知らない過去の自分もこんな風に笑っていたのだろうか

こうして笑いながら喋る事がなんだか懐かしい気分になってくる。

「つつ！！」

「黒子どうしたの!？」

急に頭が割れるように痛くなり私はその場に座り込む。

さつき見た和の笑顔に一瞬重なった『どこかで見た事がある笑顔』。それが欠落していた記憶で、それを見た反動だったのか懐かしさを感じるあたり記憶と無縁では無いだろう。

しかし、これ以上考え込むとさらに頭痛がひどくなりそうだ。

「いやっ、大丈夫。時間が無い、急ごう」

頭を抱えながらよろよろと立ち上がる私を心配そうに和は見ているが時間が無い事は確かなので先を急ぐ事にしたらしい、次の作戦について話し始めた。

「ええ、そうね。次はあんなに上手くいかないと思うわ。護衛は後一人だけターゲットと一緒に居るのはまず間違え無い。それにターゲットと一緒に居るって事は腕は相当なのも確か。でも勝機はある」

幾多の戦闘により身に付けた経験と知恵を使った作戦なのだろう。自信の表情をする和に私の期待は広がった。

「正面对決よ！」

「えっ それだけ？」

狼狽する私に自信満々で頷く。

「なに？なんか文句あんの？」

「いや、なにも」

フードコートから客室への階段を下り、客室から車庫室へと下りる。車庫室は車は無くただっ広い空間に二人の人影がなにやら言い争っているように見える。

階段で身を低くし、様子を伺うがえるがここからじゃ何も聞き取れ無い。

「仲間割れ？　してるみたい。チャンスは今しか無いわね」

和は突撃の合図で頷く。

私も了解という意味で頷いた。

「動くな！少しでも動いたら頭ぶち抜くわよ」

二人の背後へ回り込み私はボディガードを、和はターゲット自分の父親に銃を突きつける。

「命狙われてるのに仲間割れとは余裕ね？それを渡してもらおうよ」

「絶対に嫌だ。家族すら犠牲にしたこのサンプルは私の全てだ。これを奴らに渡すまで絶対に手放さない！」

「ふーん　その家族の顔すら忘れてるみたいだけど？さあ、十秒以内に渡しなさい　十」

和はカウントをし始める。父親を殺す覚悟は出来ている顔だ。

「照国さん　さっきの話の続きだか、あんたが俺にそれを使わしてくれたらなにもかも解決しないか？それとも渡さずにこの小娘共に殺されるか？まあ俺はあんたが殺された後からサンプルを奪うだけだよ」

ボディガードが不適な笑みを浮かべながらターゲットに話掛ける。

「九」

「そんな口車に乗るもんか　」

「八」

沈黙のままカウントだけが過ぎて行く。

「七　六　五　四　三　」

「もう辞めだ。俺もあんたのサンプルを奪うとするか」

「!?　なにを言っている！私はお前に多額の金を払った雇い主だぞ！」

「うるさいよ。俺はサンプルが欲しいんだ」

その瞬間、空気が一変した。

車庫室中が殺気へと変わり和もカウントを止めている。

一瞬だった。呆気にとられたから空きの私の腹部に肘で殴り飛ばし、ターゲットの後ろに居る和をターゲット越しに回し蹴りで蹴り飛ばす。そして、ターゲットの目の前にはボディガードの男が立っている。

素人の私ですらわかった。

この男は殺される、と

「お父さん！逃げて！！」

和が叫んだと同時に男は長いコートの腰からファイティングナイフを取り出してターゲットの胸部を深く抉る。

「そんな」

和は啞然とその姿を見ていた。

ターゲットは胸部から血を溢れ出し、そのまま地面に崩れ落ちる。

男はターゲットの手から離れたアタッシュケースから注射を取り出し、そのまま自分の腕に打ち付けた。

しばらく男は動かなくなり次第にピクピクと動き始めた。

「おお、すごい　　すごい！すごい！すごい！これさえあれば上層部の連中も皆殺しにできる！最強だ！」

「おい、てめえ　　なに一人でラリッてんだ？今は殺し合いの最中でしょうが。今殺してやるからそこ動くなよ」

和は今まで見た事の無い、ひしひしと肌まで伝わる殺気を放っていた。

和は地面を蹴り一気に男へ接近しブレザーの中からナイフを取り出し男の背中を切りつけ、切りつけた背中を抉るようにナイフと拳を

連打する。

尋常じゃない早さで攻撃する和を男はまるで相手にもしていない。それどころか準備体操のように手を開けたり閉じたりしている。

「お前が最初の記念すべき俺の新しい力の実験体第一号か」

和はその言葉にピクツと反応し更に憎悪が混じった殺気が増す。

空間が殺気と憎悪でドロドロとした空気が張り詰め私はそれに飲み込まれ無いように必死だった。

「まあ焦るな。今から俺の力を見せてやる」

すると男のズタズタに切り刻まれ抉られた背中がみるみる治っていく。

「!?!」

「そう、お前らSRPと一緒にだ。最近ここらで暴れ回っているのはお前らだろう？噂は聞いている。なんでもDNA操作により能力発達し、政府の連中を殺しまくってる子供のテロ組織 だったか？」

「あら、そういうあなたは幼少の頃から殺し屋を始め、今まで殺した数五百人以上。高見出雲露たかみしずるじゃない？そんな大物がこんな所で護衛のバイト？」

「俺の事知つてるとは光栄だね。まあ長話もなんだ、さつきから殺したくてウズウズしてんだ」

高見は振り向き様にハンティングナイフを横に一振りする。

和はそれをしゃがみ避けて相手の足を蹴りで薙ぎ払う。

高見は足を払われた反動で宙に舞い地面に身体ごと落下すると同時に和はすかさず踵を振り下ろすが高見は間一髪で避けクルリと身体を起こしながらバックステップで間合いを取る。

「いいねー、この緊張感！心臓が喜びすぎて跳ね回ってる」

「この狂乱者が」

まるで人間とは思えない攻防戦。

十分、三十分、一時間、ずっと戦いを続ける和と高見。

するとだんだん高見の表情が歪み、顔色も悪くなってくる。

「顔色悪いわよ？そろそろ限界きちゃった？」

「はあ　　はあ　　お前も油断してると痛い目みるぞ」

高見は無鉄砲に和に突っ込み攻撃を仕掛けたと思いきや、いきなり進路変えて私に向かってハンティングナイフを振り下ろす。

「黒子！」

傍観を勤めていた私はテレビでアクション映画を見ている気分で心を高鳴らしていた。

だがそこはお茶の間でも映画館でもないのだ。

そう、現実。私は傍観者や視聴者ではなく当事者なのだから。

先ほど蹴られた腹部の痛みを忘れた訳でもない。

ただその常人離れた戦闘に見とれていただけ。

もう駄目だと思いい覚悟を決めて目を閉じる。

なかなかナイフが下りて来ない。

その代わり、座り込む私の足に生暖かい雫がポタポタと落ちる。

目を開けると和が覆い被さるように私を庇い、背中にはナイフでザックリ抉られていた。

「あんたって本当に私の邪魔ばかりして　　本部に帰ったらしっ

かり教育してやるんだから覚悟なさい」

和は優しい顔で笑って見せる。

高見はナイフをもう一振り横に振り切る。

和の頭が吹っ飛び、遠くで鈍い音で落下する。

ここで残った身体を私は茫然と抱き締めるだけだった。

どくん、鼓動の高鳴りはもはや私を気絶させる為には容易な衝撃だった。

これは夢ではないだろうか。

私はぼんやりとそんな事を思った。

槍のような豪雨の中、自分より遥かに幼い少女が路地裏を走っているのを客観視点で見ている。

口から漏れる息が白く変わっているあたり季節は真冬だとわかった。なのに少女は季節外れな洋風のシャツとスカートを着ている。その格好からして良いところのお嬢様と思わせる少女はどことなく切羽詰まる剣幕でブーツで水溜りを跳ね上げながら走っている。

片手にはサイレンサー付きの拳銃を握りながら。時刻はたぶん深夜、人気のないビルの裏口であるう扉の前で立ち止まった。

ビルの最上階には一っただけ明かりが点いてあり、少女は睨む様に見上げている。

あらかじめ鍵を開けていたのか、こじ開ける事なく裏口を音も無く入っていった。

暗闇のビルの中を戸惑う事なく非常階段を向かい少女は周りには一切気を配る様子もなく明かりの点いたフロアへとひたすら駆け上がる。

少女の身体能力には堪えたのか息を荒くしながら目的のフロアへと到着し、非常階段の踊り場で息を整えて扉を一気に開け姿勢を低くし走り出した。

明かりの点いたフロアには男三人である部屋を守らんと警備している。

少女が非常階段から出て来た一瞬は戸惑った彼らだが、その一瞬にして状況を把握出来たあたり男達はプロだろう。そんなプロ達が腰から銃を出す前に男達の額には穴が空いていた。

少女は倒れた死体を気にすること無い。

目的地へと進みながら死体を創り返り血を浴びる少女はまるで死神のようだった。

そして目的の個室に着いた少女は勢いよく扉を蹴り破り、部屋の主に躊躇なく弾丸をぶち込んだ。

部屋の主はあっさり死んだのにも関わらず少女は頬に涙を流しながら、何度も何度も弾丸をぶち込んだ。

血に塗れたこのフロアでひたすら銃声だけが鳴り響いていた。

1 - 3 再会、そして別れ（後書き）

ご意見、感想、アドバイスを、どんな事でもお待ちしております。
どうか温かい目で読んで下さい。

2 - 1 朽ちた家系と選った血筋

気がついた時、私の目の前には見慣れた病練の天井があった。自分にとつて一番懐かしいと思えるこの風景は安心感がある。しかし、悪い夢を見ていた気がして目覚めの悪い事この上ない。こんな事で憂鬱だ、と気が晴れないのは陰気な自分の性格が原因なのだろうか。

大事な事を忘れていている気がしてならないのも寝起きのまだ覚醒していない脳のせいだと思うし、どうしてこんな所で寝ているのかも思いつけない。

先日やっと完治した私は総一郎さんに宿舎の一部屋をもらったのだから目覚めたらそこにいなくてはおかしいーいやっ、そんな深く考える事でもないだろうと自分に言い聞かす。

些細な事に深く考え込むのは私の悪い癖だ。

粗方、寝呆けて彷徨ったあげくここにたどり着いたのだろう、

そう考える事にした。

そんな事より心踊るイベントがあるのだ。

そう、今日から初出勤だ。

SRPというこの研究所の暗殺組織に配属が決まった。

それは自分で言い出して決めた事だったので不満などあるはずはないし、それどころか総一郎さんへの恩返しにはピッタリのこの部署に満足感すらある。

しかし、一つだけ気になる事があった。

記憶喪失になった私は数日前にこの研究所に引き取られた事や、SRPに入る事になった経緯や意図なども覚えているが、そこからの記憶がまた欠落していた。

まるでいらぬ部分を消しゴムで消された様な曖昧な感じ。

記憶障害の後遺症なのだろうが、なんとも腑に落ちない。

とは言っても自分の脳の中には必死になって探るほど記憶が無いの

だが――

そこで扉をノックする音がして自分がまた考え込んでいるのに気が付いた。

「どつぞ……」

そう言うのと静かに扉を開いたのは礼服を纏った総一郎さんだった。

「起こしたかね？」

無言で顔を横に振る私を見て、総一郎さんは優しく顔を綻ばせた。

「さて、朝食の時間だ。黒子も支度なさい」

はい、と私は無機質な返事を返す。

私達にとってこの時間の、このやり取りは恒例の様なものになっていた故に、いつもと変わらぬ朝に、いつもとは違った些細な変化に目敏く気付いた。

「あ、あの……一つ聞きたい事があるのですが、聞いてもいいですか？」

「なんだ？言つてごらん」

どうにも聞き出す事に躊躇していたが、それが気にかかり総一郎さんの折角の朝食が台無しになるのも忍びない。

だから決心して問いかけた。

「あの……今日は何故礼服などを着ておられるのですか？誰か……その……お亡くなりなられたのでしょうか？」

聞かなければよかつたかもしれない、と後悔するがもう遅い。

言葉は一度発すると元には戻らない。

それ故に、言葉は刃物という比喻もある。

「昨日、私の大事な部下が作戦の途中で死んでしまった。いやっ、正確に言うとは生死は確認できていないのだかな……現場には死傷は確実と思われる血痕が発見されたのだから、遺体は発見されていない。まだ死んだと決まった訳じゃないが、万が一の事を考えて祈つてやる事は出来るだろうと式を行ったんだよ」

彼は呟く様に答えた。

悔しいのをぐつと堪えて絞り出した様な声。

自分の知的好奇心の為に彼が心が病むのを見たくなかった。

そして、自分の身勝手な発言と彼をこんなにも苦しめた『そいつ』が恨めしい。

そこでパンと手を叩く音が聞こえた。

「お前まで暗い顔をせんでくれ。さて、朝食をとろう。ワシはもう腹ペコだ」

落ちていく空気を一掃する様に総一郎さんは朝食をとりにいこう、と促した。

自分では気付かないうちに私まで暗い顔をしていたようだった。

もとより、総一郎さんとの朝食を何より楽しみにしていたから聞いた話だ。

それで気分が晴れなくなつては本末転倒だ。

「はい、そうですね」

彼の気遣いを無駄にしないように少し声のトーンを上げて言う。

それ以上言う事はない。

例えば、何故着替えずにわざわざ礼服を着てきたのか、例えば、何故朝から式を開いたか、例えば、何故私はそれを知っているのに彼は他人事の様な言い回しをしたのか。

「よくもそんな悠長な事を言っけいられたものだな」

朝からの式と新入社員である霧島黒子の入社式を終え、午後昼過ぎに休む事無く行われた部長会議で見知らぬ顔の男は言った。

名目上、この会議は研究費の分配など研究者にとって命を繋ぐほど重要な会議である。

もちろん、総一郎も出席している。

しかし、彼等は重要な研究費より欲しいモノがあった。

それは、一週間にして死に繋がる重度の怪我を自然治癒で完治までしてみせた黒子だった。

彼女はDNA操作無くとも常人越えした治癒能力が備わっていた。ある研究者は神の子と言うほど崇拜している者さえいる始末。

そんな貴重な実験体を、あんな訳のわからない部署なんぞに渡してたまるか、と研究者達は口論していた最中、どこぞの馬の骨ともわからぬ男が総一郎がいるにも関わらずふんぞり返つてものを言う姿を見て研究者達は黙る以外出来なかった。

「今問題なのは行方不明の照国和と十三研究所のサンプル持ち去った高見出雲露だろう。しかも、よりにもよって照国和ってのが運が無い…そんなに欲しけりや霧島黒子なんぞくれてやる。しかし、目の前の宝に目を眩まして大事なモノが見えないとは、この研究所は馬鹿揃いか？」

男は研究者達を嘲笑う様に吐き捨てる。

神宮研究所は表面上、輝かしい多くの功績を残してきた歴史ある研究所。その実、裏では政府に恨みを持ったテロ組織。

政府が気付いていない訳は無い。政府とて何度も多くの組織を使って襲撃をした。だが、圧倒的な強さのSRPは尻尾は掴めさせないのだ。

照国和はSRP中最強の戦闘能力故に、いつも最前線で戦ってきた。それは、麻薬取引をする政府に繋がるマフィアとの撃ち合い。それは、政府機関へテロを起こした後の戦闘。

それは、自分達を敵とみなした組織との殺し合い。

幾多の戦場を駆け抜けて来た彼女は裏社会ではちょっとした有名人だ。

だが、その彼女は神宮研究所の決定的な証拠でもあるのだった。

そして、十三研究所のサンプルは兵器とも呼ばれるバイオウィルス。そんな代物、政府が放っておく訳がない。

政府の手に渡る前になんとしてもその二つを手に入れなければならぬのが事実で、男の言う事はもっともだった。

自分達の愚論を嘲笑う男に我慢出来ず研究者の中でも黒子を崇拜している一人が怒鳴り上げた。

「き、貴様、黒子様を自分のモノの様に。無礼にもほどがあるぞ！」
あまりの的外れな言い分に男はやれやれと肩を竦めて見せる。

「しまいには黒子様か…そんなに神について研究したいのであれば
宗教にでも行つてこい。俺はSRP特別技術試験部部長の竜ヶ水隼
人だ。黒子についての申請があるなら俺に通せ」

その名を聞いて研究者達は動揺を隠せなかった。

竜ヶ水は有名な錬金術師の家系だった。

だった、と言うのは、有名な家系は今や朽ちた血筋だ。

そもそも現代に錬金術師など存在しない。

古くは歴とした職業だった彼等は研究過程で生み出した成果を近代
化学に様々な影響を与えて貢献したのだが、その非科学を科学的に
精錬する錬金術は結果は実る事無く化学の踏み台にしかならなかつ
た。

歴代から成果を出してきた世界でたった一つの公的錬金術師家系で
ある竜ヶ水も世間からは宗教的思想の研究者、神の真似事、と白い
目で見られていた。

だが、七代目当主竜ヶ水鳳仙りゅうがみずほうせんはある偉業を成し遂げた。

彼が成し遂げた成果は錬金術師の究極の目標ともいえる賢者の石だ
った。

ある日、竜ヶ水鳳仙は賢者の石の研究が成功した、と発表し、ただ
ちに会見をしたが実体はみせれないが成果は見せられる、と朽ちた
ナイフを何も無くして魔法の様に精錬させ、現代社会に錬金術を蘇
らせたのだ。

しかし、そんな大偉業を成し遂げたにも関わらず、又もや錬金術は
現代社会から抹消された。

それは竜ヶ水鳳仙の謎の殺害事件と賢者の石の消失、そして賢者の
石を成し遂げた錬金術師の息子――竜ヶ水隼人の失踪が原因だっ
た。

そもそも賢者の石の存在すら怪しいところだ、と人々は疑問を抱き
始め、真実は闇の中に錬金術と一緒に消え失せたのだった。

その失踪した竜ヶ水隼人が目の前に現れた事に驚愕する神宮研究所の者達は言葉が出てこない。

「話は以上かね？諸君」

その沈黙の会議に終止符を打ったのは神宮総一郎だった。

それに対し皆は罰の悪い顔するが反論する事はない。

「では、部長会議はこれにて終了する。解散」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3604v/>

TRUE BEAT ~ 追憶の少女 ~

2011年11月29日00時49分発行